

●REC

「経験人数は？」

「人数凄いね」

「彼氏いる？」

「彼氏以外とも結構してるんだ？」

「13人……とかあ？」

「……います……♡」

「……はい……♡」

「初体験は？」

「中2の時に先輩と……♡」

「なんで今日撮影応じてくれたの？」

「彼氏が粗チンで……欲求不満で……♡」

「えっち好きなんだ？」

「……大好き……です……♡」

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ



『それじゃあまた来週!!』

「分かった！
楽しみにしとく！」

『それじゃあまたね』

「うん！」

(……ふふ、デート楽しみなあ……♪)

「よぉー〇〇ー」

「あ、**先輩……どうも」

「最近全然サークル
顔見せねえけど……どーしたん？」

「あ、えと……彼女が出来たんで……
やめようかなと……」

「さすがに活動内容的に……ね……
バレたらフラれちゃいそうですし……」

「ふうーん」

（あんなサークルに所属してたのがバレたら
フラれるどころの騒ぎじゃないっつーの…）

（映像研究サークルとは名ばかりの
**先輩主導の同人AV撮影サークル…）

（アニメの話とか色々出来るかと
思ってたのに…すっかり騙された…）

（けどまあ…生で撮影見せてもらったり
格安でAV議ってもらったり…
いい思いもさせてもらった…けど…）

（もう今までの俺とは立場が違うからな…
『リゼ』に失望されたくない…）

「あつそ、ならまあいいけど……
……うちのサークルのこと他所に漏らすなよ？」

「わ、分かってますよ……」

「……ならよし
っーかそんなことよりよお」

「お前が来てない間に……
また新作撮ったんだわ」

「サークル割してさあ……
特別に無修正販売ってやつからさあ
買ってくんね？」

「もうサークル抜けんだろ？
これがラストチャンスだぜえ？」

「う、うーん……」

(リゼに失望されたくない…
ない……からこそ……)

(こういう動画を買って
自分で性欲処理するってのは……)

(大切…なこと…だよな……?)

(うんうん、そうに違いない…!
この前みたいにやりたいって
がっついたらダメだって
思われるかもしれないし…!!
うんうん…俺は間違っていない…!)

「か…買います…!」

「毎度あり♪」

（数時間後・自宅）

（よし……それじゃあ早速……
買ったAVでも見ようかな……）

（このサムネも何にもない無骨な動画ファイル……
毎度毎度開く時ワクワクすんだよなあ……
ガチャみたいでさあ……）

（たまにすんげえ有名人引っ掛けて
来たりするんだもんな、先輩……）

（そんなイケメンってワケでもねーのに……
むしろブサイクだらあいつ……）

（……ま、そんなことはどーでもいいーや……）

（今日の女はどんな
ヤリマンバカ女かなあ……っと……♪）

カチッ……

「……え……？」

ドギッ



「ちよちよちよちよちよ……
待……え……？」

「……リゼ……!!？」

ドク……ドク……
ドク……ドク……

ドク……ドク……
ドク……ドク……



「えー…ちよつと…♡
撮るんですかあ…:…:??

「『立場』的に動画は…
ちよつと困るかも…:…:♡」

「いーじゃんいーじゃん♡
撮影するフリだよフリ」



「ええー……?」
「ならいい……かなあ……?♡」

「もし撮ってても
流出とか絶対させないから!!」

「なにそれw
気をつけてくださいねえ?」



(なんだこれなんだこれ...!!
何が起きてんの...!!?)

(リゼ: 本人だよな!!
立場的に...とか言ってるし...え!!)

(え...? ええ...? ...どういふこと...?
はあ...? 訳分かんね...っ...!!)



バグン...
バグン...

バグン...

バグン...
バグン...

バグン...

バグン...
バグン...

バグン...

バグン...
バグン...

バグン...

バグン...
バグン...

バグン...

バグン...
バグン...

バグン...

「せっかくだしさあ
する前にちよつとインタビューしてもいい?」

「テンション上がったよねえ♡」

?

「はあ……まあいいですけど?」

「じゃあまずはあ……」



「彼氏とかいんの？」

「ん〜……まあいますよ〜？」

「へ〜、いつから付き合ってたんの？」



「大学入ってしばらく経ってからですね…
幼馴染だったんで…そのまま流れで…みたいな」

「へー幼馴染…
それは『地元』に居た頃の…だよな？」

「そうですね…
凄く仲良かったんですけど
彼の家族が引っ越しちゃって…」



「で、偶然大学で再会したってことかあ」

「はい」

「ふうりん……
まあまあそれはいいんだけどさあ……」



「彼氏いんのにい…
なんで撮影応じてくれたのお？」

「……それはあ……」



「……彼氏が粗チンでえ……♡」

「…へえ〜♡」

「はあっ…はあっ…!!」

(別人だと思ったかった)

(でも……)

(俺が楽しみにしていたヤリマンバカ女は
どこからどう、何をどう見ても……)

(ヘルエスタの『皇女』であり……
俺の『彼女』だった……)





（今すぐにでも、見るのをやめたかった）

（彼女がああのブサイクな先輩と…
今から…想像するだけで吐き気がする）

（だが、目の前で起きている異常事態が）

（見るのをやめることを、許さなかった……）

「彼氏粗チンなんだ
どんな人なの？」

「体の相性以外は…いい人…とだけ…♡
他はちよつと…個人情報なんで…♡」

「あーそつかそつか♡
…それじゃ経験人数…
…教えてもらえる？」



「13人です♡」

(13人…!?)

!?

「へっ!!
意外だわっ…」



「人数凄いねえ？
彼氏以外とも結構してんだ…
初体験はいつ？」

「中2の時に高校生の先輩と…♡」

「先輩がアンちゃん…
あ、幼馴染なんですけど…」

「……先輩がアンちゃんのこと狙ってて……」



「私が守らないとなーって思ってたら…
いつの間にか私が食べられて…的な♡」

「へー…そこから色んな人としてきた感じだ♡」

「です♡
一回黒人の人ともしましたよ♡」



「マジ!?それは凄いね」

「……てことはもう立派な
ヤリマンビッチってわけだ♡」

「言い方ひどい♡
まゝそうですけど……♡」



「今までしてきたえっちで
一番気持ちよかったのは誰？
気になるんだけど」

「えーっとお…それだったら
高校生の時に援交したおじさんかなあ…」



「へー……黒人じゃないんだ？」

「あー……あれはあ……
気持ちよかったですけどお……
それよりなんかもう痛くて……」
W

「なるほどね」



「で、そのおじさんは上手かったんだ？」

「すっごい上手かったんですよー」

「まだあの人より
気持ち良くしてくれた人いないですもん」



「それじゃあ俺がそのおじさんより
気持ちよくさせてあげよっかなっ」

「ん……♡……♡」



「この陥没乳首♡
絶対ほじってやろうって
思ってたんだよね♡」

「んっ…♡」

「感度やば♡」



「ほらほらっ」

「あつ…あつ…♡
やっば…♡♡」



「♡♡♡♡」



「あっ乳首出てきた♡
感度めっちゃいいねりぜちゃん」

「ふー…ふー…♡」

「ここまでとは思わなかったわ…
ムラつきやべえわ♡…よっと…」



「わっ…」

♡ブルブル♡♡



「今からこれでたっぷり
犯してやつからなあ♡」

「1番よかったって
言わせてやるぜ♡」

「ぐへ…♡」



「そのまま寝取って
俺の女にしてやるわ♡」

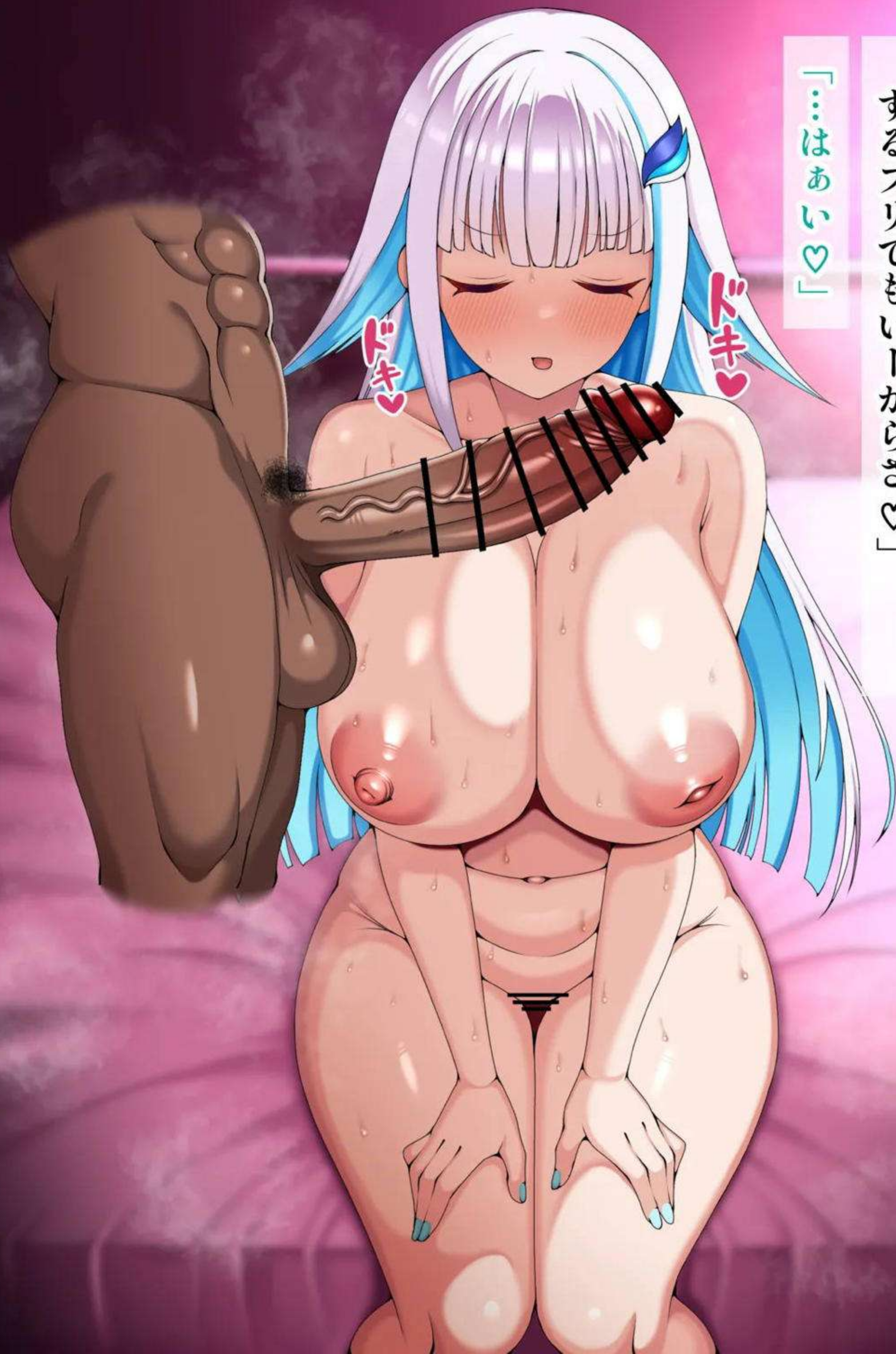
「……そ、それはちよつと……♡
一応今は彼氏一筋っていうか……♡」

「彼氏以外の男に
股開こうとしてる
クセに何言ってるんだか♡」



「ほら、する前に彼氏に謝つとけよ♡
するフリでもいいーからさ♡」

「…はあい♡」



「ごめんねー○○○♡
実は私、○○○が思ってるような
清楚な女じゃないんだよね♡」

「○○○の粗チンじや満足出来なくて……」

「先輩のナンパに引っ掛かっちゃうような
バカマンコなんでーす♡」

「ごめんねえー♡」



「これでいい…ですか？」

「おいしいよいいよ♡
めっちゃ盛り上がるわ♡」

「じゃあさっさとパコっちまお♡」









おほい

お

お

お

お

お

お

お

お



「うっは…♡
ヤリマンのクセに締めまりいいじゃん♡」

「それに感じすぎでしょ♡」



「こんなザコマン満足させれねー
彼氏のちんぽって……
どんなザコチンなんだよっ♡」

「あゝ精子登ってくるう……っ……♡」

ズン♡
グン♡

ズン♡
バツン♡

エ



「ごめんリゼッ♡
生で出すわ…ッ♡」

「後で薬は用意すつから…♡」



「ちよつ、それはダ…ツ♡」





うぶな

グニ

グニ

ドゥ



ふー...♡

ほー...♡

♡
ふー...♡

♡
ふー...♡

グ

グ

♡
ふー...♡

♡
ふー...♡

「♡……♡」





「ふ...ふ」

ふい

アッ

エロキ...

ふ

「めっっちゃ出たわ…♡」

「うわ…本当に中に…♡
も…責任取ってくださいよ…?」

「…うわ、そのセリフいーねー♡
めっっちゃ滾ってきたわ♡」

バキ♡
ドキ♡



「……もう……♡」

「もっかいやろーぜ♡」

「あと一回だけですよ？」

そのあと僕は何度かそのA Vで抜いた
悔しくて仕方なかったがなぜか死ぬ程興奮した

リゼとは気まぐしくなってしまい、
段々と会う機会も連絡を取る機会も減っていった
その代わり先輩にA Vを買うことが前より増えた

先輩から買ったA Vには、たまにリゼが映っている

それで狂ったようにシコリ続けた結果
リゼはいつの間にか俺のそばからいなくなっていた

そして、その後……先輩の側にリゼは行った

その目を境にリゼのA Vは無くなっていった
自分の女は他人に見せない主義なのだろう

さらに目が経ち
先輩がどこかに引越すことになった

行き先はヘルエスタ王国らしい
……本来そこにいるのは俺だったのに
そう思いながら今日も俺はリゼでシコるのだった